2016 年度 小委員会活動成果報告

（2016 年 12 月 15 日作成）

小委員会名	環境建築システム刊行小委員会	**主 査 名**：長井　達夫 **就任年月**：2015 年 4 月
所属本委員会 （所属運営委員会）	環境工学委員会 （企画刊行運営委員会）	**委員長名**：羽山　広文 **主 査 名**：村上　公哉
設　置　期　間	2015 年 4 月　～　2017 年 3 月	
設　置　目　的 各年度活動計画 （箇条書き）	・2015 年度：刊行計画の確定、執筆状況の確認、小委員会内における査読を経て原稿を完成させる ・2016 年度：書籍を刊行する	
委員構成 （委員名（所属））	**委員公募の有無**：なし 長井達夫（東京理科大学）、下正純（竹中工務店）、丹羽勝巳（日建設計）、山本佳嗣（日本設計）、赤司泰義（東京大学）、石野久彌（首都大学東京名誉教授）、郡公子（宇都宮大学）、木幡悠士（NTT ファシリティーズ）、田島昌樹（高知工科大学）、中山哲士（岡山理科大学）、永田明寛（首都大学東京）、羽山広文（北海道大学）、藤村淳一（大成建設）、丸山純（松田平田設計）	
設置 WG （WG 名：目的）	なし	
2015 年度予算	円	**ホームページ公開の有無**：なし **委員会 HP アドレス**：

項　　目	自己評価
委員会開催数	0　回（年度内計画を含む）
刊行物 （シンポジウム資料等は除く）	1．見る・使う・学ぶ　新世代の環境建築システム
講習会	1．　参加者数　名
催し物 （シンポジウム･セミナー等） *能力開発支援事業委員会承認企画	1．シンポジウム「新世代の環境建築システム ― デザイン論と技術論」を建築設備運営委員会環境建築小委員会と共同で開催（6/3、建築会館ホール） 参加者数　119 名
大会研究集会	1．　参加者数　名
対外的意見表明・パブリックコメント等	1．
目標の達成度 （当初の活動計画と得られた成果との関係）	1．予定通り執筆を終了・刊行した
委員会活動の問題点・課題	1．特になし

＊小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

＊表中の「(書名)」等の赤文字は、記述を誘導するための説明である。記載の有無にかかわらず最終的には削除のうえ提出すること。

＊　小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

＊　中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学委員会用　自己評価欄

2016 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価・最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	(A)　B　C　D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	本小委員会は、書籍「見る・使う・学ぶ　新世代の環境建築システム」を刊行することを目的として設置した。 2015 年度は、執筆内容の確定、執筆、小委員会内の査読、執筆を完了した。最終年度の本年度は、校正作業の後、6 月に刊行し、かつ本書籍の内容とも関連のあるシンポジウム「新世代の環境建築システム － デザイン論と技術論」を建築設備運営委員会環境建築小委員会との共同で開催し（6/3, 建築会館ホール）、119 名の参加者を得て活発な議論が行われた。 本書は、主として最先端の設備的要素技術に着目し、それぞれの要素技術について、「見る」、「使う」、「学ぶ」の 3 部構成により多様な読者層を対象に「見えにくい」設備技術を紹介・解説するものであり、その実用上、教育上の効果が高く、また予定通り刊行されたことから A 評価とした。

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画･目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価･外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。